

板橋でチャリティー・ショー

被災者が心をひとつに

ふるさとネットワークが主催するチャリティー・ショーが1月28日に行われ、島民や三宅の復興を支援しようという人が集った。ショーの中では、参加した阪神・淡路大震災の被災者が三宅の人と心を一つにする姿がみられた。



ショーの終盤 みんなで歌った「冬のひまわり」

「三宅島避難解除2年 帰島条件改善! 非帰島島民支援板橋の集い」チャリティー・ショーは1月28日に板橋区立「いこいの家」で行われ、未だ故郷に帰れない人を励ますために行われたこの集いには、非帰島民や支援者計143人が参加した。

1時50分に始まった会では、冒頭にふるさと

三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと
再生ネットワーク
〒100-1101
東京都三宅島三宅村神着 320-2
Tel. 090-4922-0798
発行人：会長 佐藤就之

事務局便り

- ネット活動テレビ・ラジオで放送される！
帰島2周年関係とアンケート紹介など放映・放送
- ・NHK 東京MXテレビ
12/8、12/18、1/31 など
- ・NHK TBSラジオ
12/1、12/16、1/19、2/12
内容は非帰島島民問題など
(問い合わせは事務局まで)

- ご寄付のお願い！
多数の方にご寄付を頂きありがとうございます。これからも宜しくお願いいたします。
郵便振替口座
口座番号：00120-3-545036
口座名称：三宅島ふるさと再生ネットワーク

事務局：あすなろ保育園内
住所：173-0005 板橋区仲宿 25-6
電話・FAX 03(3963)5697
担当 大坊・伊藤

ネットの佐藤就之会長の挨拶や、大妻女子大学教授の干川剛史先生による非帰島島民を対象としたアンケート結果の報告があった。

続いては舞踊家の鶴吉さんのショー。「獅子の舞」初春や「五木の「望郷の詩」など8曲を二部構成で披露した。

さらに、阪神淡路大震災で被災した経験を持つ女優の京町さんなどが、神戸の震災や三宅の噴火で被災した人々の思いを、歌と語りで表現した。「みんなで島へ帰ろう」という台詞に涙をぬぐう姿の人が見られた。

最後には、京町さんが作詞した「冬のひまわり」を全員で歌い、神戸と三宅で被災をした人が気持ちを一つにした。

ふるさと再生ネット要望書提出

国や都 支援制度の延長を表明

三宅島ふるさと再生ネットワークは、避難解除から2年が経過したことが理由の各支援制度打ち切りに対して、1月23日安倍総理大臣に8項目、石原都知事に14項目、翌24日に平野村長に17項目の要望書を提出した。(各要望書は本紙の付録として添付)

2月16日の回答によれば1月31日付で内閣府令により国の生活再建支援金の引越し経費と家賃・一時的使用料の一年延期を公布施行した。

都の再建支援金打ち切り延長の提案は現在都議会にて審議中で3月9日の最終日で決まる。

国・都の貸付金について

要望書は非帰島島民の課題についてもアンケートに基づき提出したもので切実なものばかりである。特に、帰島希望者の住宅問題の解決は高齢化に伴い緊急の課題だ。これからも村議会のご協力をお願いしたい。(再生ネット会長 佐藤就之)

産業振興の基本計画

経済団体の連携強化などを

三宅村商工会指導担当課長 村上 康

避難解除から2年が経った。島民の生活は安定してきたが、島内主要産業では不安要素が多い。そこで三宅村商工会では、地域住民へのアンケート調査等に基づいた基本計画を策定した。

全島民島外避難解除後2年が経過した。島民の生活環境はやや安定してきたものの農林、漁業をはじめ商工業、観光産業等、島内主要産業は未だに大きな不安要素を抱えたまま推移している。このような中、三宅村

商工会では地域小規模事業者のニーズや地域経済情勢、三宅島の産業振興計画を踏まえて、計画に基づき事業を実施し、弛まぬPDCAサイクルの構築により地域経済の活性化を図るための基本計画を策定した。

本計画は策定委員会での真剣な議論、地域住民からのアンケート調査に基づいたものである。島内で生産される農水産物の島内流通、島外販路開拓を図り、地域の経済活

この計画の実施に向けて邁進して行くことは簡単ではないが、地域住民自らが三宅島の産業を支えて行くという意識を持つてすれば、必ずや産業の復興、振興に向け一歩ずつ着実に進んで行くものと確信している。

性化を目指すと共に島内生産物や未利用資源の有効活用を図るべく、加工品の研究開発、保存方法等の研究を柱とする計画を作成した。具体的には、経済団体の連携強化による組織づくり、郷土料理研究会の実施、特産品の開発、特産品の販売、インターネットの活用、特産品に関する拠点作り等とした。

ネット情報コーナー
アカコッコ通信「短縮版」
インターネット上の昨年12月〜今年2月までの情報です。

住民の支援 延長へ

今後、島に戻る住民のために国や都などの支援制度が延長されることが決まりました。

1月31日(水) NHK ニュース
(<http://www.nhk.or.jp/nhknet/spot/miyake/index.html>)

センバス 都留高が初出場

山梨県大月市の県立都留高校に26日、吉報が届いた。「21世紀枠」でつかんだセンバス初出場。

三宅高校の山本監督は都留の出場決定を聞き、5人の部員と喜びを分かち合ったという。両校は三宅島が噴火災害で全島避難した翌年の01年から、交流を続けてきた。

1月26日(金) 毎日新聞
(<http://www.mainichi-msn.co.jp/sports/ama/high/>)

特養老人ホーム 新職員に辞令交付

今年4月に三宅島で6年半ぶりに再開される島で唯一の特別養護老人ホームに7人の職員が新たに採用され、2月5日に辞令交付式が行われました。

2月5日(月) NHK ニュース

三宅村議会 一般質問

昨年12月に開催された三宅村議会第4回定例会一般質問での、議員と村長及び村の担当者間の質疑についてです。

(<http://thoshikawa.com/miyake.furusato.net/kouteki/070201.html>)、(http://web01.cpi-media.co.jp/teramoto/gikai/shitumon/2006_4.htm)



神着にある商工会

三宅村商工業者現況
島内事業所再開状況

噴火前事業所	営業中	217
	準備中	10
	計画中	33
	廃業予定	77
	合計	337
営業中の内訳	① 島内で営業再開	211
	島外で営業中	1
	営業中の内、移転	5
	② 新規開業	48
噴火後	③ 作業員宿舍限定開業	2
	島内事業所数 (①+②+③)	261

2007/2/1 現在



三宅の火山災害を取材する

NHK解説委員 山崎 登

プロフィール

社会部記者として自然災害と防災の報道に20年ほど携わり、2000年にNHK解説委員となる。主な出演番組は「時論公論」「NHKニュース おはよう日本」。

NHKで自然災害と防災を担当する解説委員の山崎登さん(53)に、三宅の火山災害の特徴、及び今後の火山災害対策に対する考えを伺った。

他と違う特徴を考慮して

私は、自然災害と防災を担当するNHKの解説委員をしている。火山災害の現場へ出かけることも多い。最近では1988年の十勝岳の泥流や1990年の雲仙普賢岳の火砕流、それに2000年の有珠山の地域ぐるみの防災対策などを取材してきた。同じ2000年の6月に地震活動が活発になった三宅島へも、噴火前に出かけたほか、住民が避難していた時期や帰島から半年後にも訪ねた。

そうした取材を通して、私は、火山災害はほかの災害と大きく異なっ

た特徴をもっていると考えている。したがって、防災対策や被災者の支援にあたっては、そうした火山災害ならではの事情が考慮されなくてはならないと思っている。

長引くガスの放出

私が思っている火山災害の特徴は二つある。一つは、災害が長期化することだ。1990年の11月に噴火した雲仙普賢岳災害では、最大で1万千人余りが避難し長い人は6年に及んだ。2000年3月の有珠山噴火では1万6千人が避難し、避難指示は1年4ヶ月続いた。そして、2000年9月に島のすべての住民約3千800人が避難した三宅島は、4年6ヶ月の避難を経て、

2005年2月に避難指示が解除されたが、いまだに3分の1に当たる約千人の住民が、火山ガスなどの影響で帰島できないでいる。

二つ目の特徴は、災害の見通しが立ちにくいことだ。三宅島の雄山は、これまでも20年ほど60年ほどの間隔で噴火を繰り返してきたが、今回のような山頂からの噴火は1940年以來で、山頂部が沈み込んでカルデラができたのは2000年ぶり以上だという。また、噴火後に有毒な二酸化硫黄を含んだ火山ガスが大量に、しかも、現在に至るまでの長期にわたって放出され続けているのは、世界の火山でも例がない。長期的にみると、活動は低下傾向にあるとはいえないものの、現在の火山学をもつてしても、今後の正確な見通し

を立てることができない状況だ。今も、三宅島では火山ガスの監視が24時間体制で行われ、高濃度地区では居住禁止の措置がとられている。

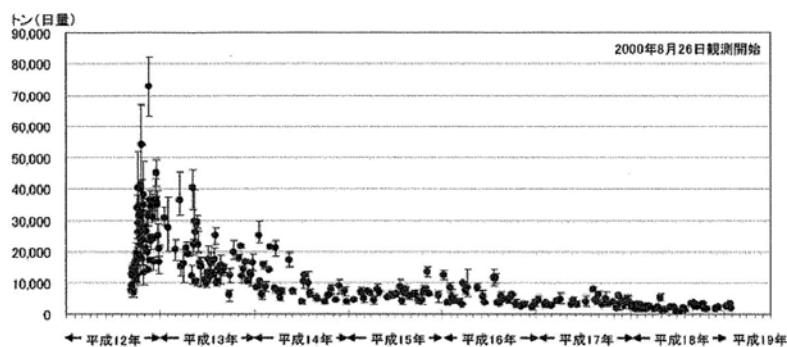
息の長い支援を

こうして見てみると、三宅島の噴火災害は今も続いているだけでなく、まだ終わりのみえない災

害だということがわかる。

その上、現在の災害対策は、災害が起きる前の予防対策、災害が起きた後の応急対策、それに災害がおさまった後の復興・復興対策が中心で、災害そのものが長期間続く今回の三宅島のような火山災害を想定したものになっていない。

このため、これまでも火山が噴火する度に、被災者や被災地の支援のあり方が議論になり、その都度の個別の対応がとられてきた。最近も、三宅島の住民が島に帰る時の引越費用や住宅を再建する際の支援金などの支援制度が延長されることになったというニュースが伝えられたが、三宅島の問題にどう取り組むかは、世界の活火山の10%がある日本の防災にとって重要なテーマだ。私は、今後の三宅島への対策を考えながら取材すること、これからの日本の火山の災害対策を考えることにつながっている。



三宅島の火山ガスの放出量(気象庁)

【非帰島島民の方からのお便り】

○いつも三宅島の情報を送って頂き有難うございます。毎回楽しみに拝見させて頂いております。私もあまり体調がよくないもので、お手伝いすることも出来ず心苦しく思っております。又、この度はお米券を送って頂き有難うございました。(中略)ネットワークの事務局の方々のご健康を心よりお祈り申し上げます。(調布市Aさん)

○会長さん始めふるさとネットワークの皆様お変わりございませんでしょうか。いつも心温かいご支援ありがとうございます。今年は2度目の正月を迎えることが出来ました事は会長さん始め皆様のお蔭と深く感謝しております。今年もよろしくお願い致します。(北区Yさん)

【ご寄付者名】

(12月5日～1月28日、数字は寄付の回数)

洞爺湖町長長崎良夫様職員一同様、江利川夏江様③、南海タイムス社様②、吉田志織様②、崎山敏也様②、T様、板橋和夫様

【チャリティー・ショーで17万9787円のご寄付】

仲宿東町会様、江口力様、岩渕強様、荻野和子様、川島徹様、高橋栄一様⑥、羽深綾子様、小島様、東京信用金庫支店長中村美津夫様他たくさんの方々から頂きました。

ただで多く伝えたいと思えます。(DTPA一同)

災害は、時間の経過とともに忘れられがちです。私たち、島の噴火後の情報、非帰島島民の方の状況などを、できるだけ多く伝えたいと思えます。(DTPA一同)

非帰島島民が住む都営住宅



また、三宅島出身者の石綿歯科医院様よりたくさんお米券や、三宅島観光協会元会長の上松幸男様より、三宅島の里芋のご寄付もいただきました。これらのご寄付は、都営住宅に住んでいる非帰島島民の方63世帯にお贈りいたしました。

また、三宅島出身者の石綿歯科医院様よりたくさんお米券や、三宅島観光協会元会長の上松幸男様より、三宅島の里芋のご寄付もいただきました。これらのご寄付は、都営住宅に住んでいる非帰島島民の方63世帯にお贈りいたしました。

き、ご支援ご協力をお願い致します。都営住宅にお住まいの非帰島島民の方で、お米券が届いていないご家庭がありましたら、事務局まで。(大坊)

1面に掲載したチャリティー・ショーに私たちも参加しました。たいへん大勢の方が参加していることに驚くとともに、女優の京町さんや舞踊家の鶴吉さんなど、支援者の幅広さ、そして力強さを感じました。

編集後記

災害は、時間の経過とともに忘れられがちです。私たち、島の噴火後の情報、非帰島島民の方の状況などを、できるだけ多く伝えたいと思えます。(DTPA一同)

この新聞は、向上高校新聞委員会の卒業生がつくる「DTPA」が編集作業を担当し、大妻女子大学人間関係学部干川研究室が印刷に協力しています。

温かい支援に感謝

北海道洞爺湖町長と職員からのご寄付など

ふるさと再生ネットワークでは、歳末助け合いの寄付を募り、それを都営住宅に住む非帰島島民の方たちにお贈りした。温かい支援に対し、非帰島島民の方からお礼のお便りをいただいた。

みなさまにご協力をお願いいたしました歳末助け合いは、洞爺湖町長長崎良夫様と職員一同様

からのご寄付をはじめとして、33名の方より頂きました。(12月1日～12月31日)ありがとうございました。

「三宅島噴火の昭和史」に思う

これまでにない特異な平成の噴火

これまで4回にわたり三宅島昭和噴火史を連載してきました。三宅島の火山は古来より数多くの噴火

を繰り返して、昭和時代に起きた噴火の形態や様相も様々です。しかし、それらは割れ目噴火で、今回のように全島に避難指示が出されるようなことはありませんでした。現在もガスの被害がひどく、帰島島民も非帰島島民も苦難をしいられる状況が続いています。このようなこれまで

でに類を見ない特異な噴火の被害を受けた人に対し、支援を続けていくことが必要だということ、噴火の歴史を知ることによって感じました。記事を書く上で参考にさせていただきました『三宅島昭和史回顧録』の著者で、当時の体験を聞かせてくださった佐久間邦彦さん、ありがとうございます。(DTPA細屋)

改めて痛感した島民への支援継続の必要性